



Title	二重被爆 原子雲の下に生命を伏せて
Author(s)	山口, 彊
Citation	架橋, 8, pp.135-154; 2007
Issue Date	2007-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/25655
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-23T12:46:51Z

二重被爆 ― 原子雲の下に生命を伏せて

山口 彊

今から六十年前、昭和二十年六月頃のことです。戦局は厳しくなり、物資の欠乏や人的資源を失い、急激に戦力が低下していました。戦時に標準船として作られた一万屯型から五千屯型タンカーへ、更に油や鉄の不足から作戦の変更を余儀なくされ、吾々の作る船も小型の輸送船になって来ました。十隻のタンカーの中、三隻が無事油を満載して帰ってくれば上々のことで、船員仲間でも、太平洋で泳がされた経験を持たぬ人はありませんでした。敵潜水艦は我物顔に近海や瀬戸内海方面に迄出没しはじめていたものです。

その頃、私は長崎三菱造船所の造機設計部商船艦装設計課に勤めていました。昭和二十年五月初め頃のことです。課長の野村技師に呼ばれ、私と二つずつ年の違う青年を二人同伴し、広島造船所に約三ヶ月の予定で新しい小型船を設計する予定仕事を始めるためです。長崎にいても広島にいても、すでに本土決戦の日は刻々近づいており、来るべき時はただ時間の問題でありました。

生後三ヶ月の長男と妻と両親を残して五月初旬広島へ向かいました。途中徳山の海岸の燃料廠は文字通り全滅し一基の製油塔も残らず、一面焼け野原で、徳山駅のバラックだけが新設され、私達は前途に由々しいものを感じました。それに反して、広島町の水の都らしい緑に包まれ、戦時下らしからぬ平和な町に見えました。造船所のある江波町の寮に落ち着くと直ぐにその日から広船（広島造船所）の職場である造機設計課へ入社し

ました。課員は殆ど長崎出身者で占められていました。新設間もない広船は、広島町の一角に在る江波町の地に建てられ、兵舎のようなバラックの事務所と鉄骨トタン葺の工場と、修繕ドックのような小さなドックと、工場を包む広大な砂地から成り立ち、埋め立て地のはずれにはサンドポンプが大口径のパイプから大量の砂を吐き出していました。何事もなく毎日が平凡に過ぎ、仕事の暇な時には各々がスコップを握って、広い砂地に思い思いに自分の入るタコ壺防空壕を掘っていました。

六月の或る朝、出社後間もなく突然空襲警報のサイレンがけたたましく構内に鳴り響いたので、私達は取るものも取り敢えず、各自のタコ壺に身を沈め首から上だけ出してあたりの様子を伺っていました。爆音の気配がすると、やがて前方海上の水平線に、朝の陽にキラキラ光る豆粒のような敵機の大編隊が現れ、みるみるトンボ位の大きさになり、一群百機位の数段の大編隊の遠い爆音はやがて轟音となって、海と空を圧しはじめました。侵入のコースは広船方向で胸がドキドキして来ました。このタコ壺の中で何の抵抗も出来ず、一卷の終りになるかも知れぬ私自身の数十分後の運命を考えると口惜しかった、「どうにでもなれ。」と度胸を決めた時、不思議な現象が起こったのです。突然敵機の大編隊は、一斉に方向転換をはじめたのです。「呉軍港だ。」一期せずして一同がそう思った時、先頭の一群の敵機目がけて在港艦艇の対空砲火の火蓋を切りました。赤く焼けた鉄のように見える曳光弾幕が蛇の舌の様に弧を描いて交錯しました。続いて編隊から一列縦隊の鮮やかな敵艦載機のダイビングの連続、山影に急角度に降下して、その低墜されたかに思えたが、敵機は次々に再上昇して現れ、大激戦が展開されました。先刻の恐怖心も薄れ、戦記映画の空中戦そのままの息づまる彼我の熱戦に吾を忘れていました。地上砲火の狂気の様な熱戦でした。さすがの編隊もやがて乱戦気味となり、弾幕の中を横切り、突っ込み、数百機の銀翼がキラキラ閃めくにつれ、もくもく盛り上る爆煙は呉軍港全体を覆いました。

全機突撃を終った敵機群は、つぎつぎに何処ともなく退避していったが、対空砲火や艦砲射撃も力なく散発状態となつて、二時間余りの死斗は夢の様に過ぎ去つて仕舞いました。私は放心したように、警報解除の後も砂浜の上に立ち尽くしていました。人々も三々五々肩を落した俣、それぞれの職場へ帰つていきました。広船ではじめてのショッキングな体験でした。呉は殆んど全滅に近いとの報せがもたらされたのは、その日の午後でした。この頃から制空権を握つた敵空母の本土接近が相次ぎ、関西方面の白昼攻撃が行われ、芦屋・須磨・明石方面の悲惨な状況をラジオアナウンサーの声が報道していました。仕事は敵の妨害にも関わらず順調に進んでいましたが、食糧の配給状況は悪く、寮までの空腹凌ぎに、何処で聞いたのか、佐藤君は遠い処まで草もちを買いに出掛けていました。

七月になると広島も忙しくなつて、町の疎開がはじまり、中学生や女学生たちが毎朝先生に引率されて行くのに出会いました。私達も江波寮から泉邸に近い川の畔の寮に移り、そこも疎開になるので、会社から差し回しの電動車の荷物の上に乗つてノロノロと広島町を通り、広島専売局のある千田町の新しい寮に移りました。そこは専売局に近い「御幸橋」のほとり、広島工業専門学校の裏手にあたるところでした。不思議な事に「広島」も「長崎」もひどい爆撃がなく、未だ健在でした。「広島」を避ける様にして「福山」や「岡山」が空襲される夜が続く、そのたびにB二九の爆音が定期便の様に私達の頭上を通過しました。市内では東から西へ、西から東へ灯火管制の闇の中から、荷車の音が夜の白む迄続きました。日本全国いたるところで、空襲の恐怖に戦きながら、この様な右往左往の毎夜が繰り返されています。ゲートルを着けた俣の仮寝の幾夜を、爆撃の恐怖にうなされながら暑い夏の夜の白むのを待たせました。私はよくこんな夢を見ました。本土へ上陸した敵の戦車の前に竹槍を持った俣伏せていました。機銃弾が身の廻りを包みました。私は夢の中で幾晩となく

無抵抗に殺戮されました。だが夢から覚めて思いました。妻や児の始末をどうすれば良いのか？私達は死よりも死に到る方法を怖れた、新聞やラジオも巷にも一億玉碎本土決戦の勇ましい言葉が平気で語られていました。三ヶ月の予定の仕事も終った八月のはじめ、広島の私達の寮に、出張で泊り合せた学校の先輩の鋼工場の森川良重技師から七月二十九日長崎造船所の製缶場や向島杜宅の一部が爆撃された事を聞き、三人共すぐ飛んで帰りたい気持ちでした。が、いっこうに帰還命令が出ず、イライラしていました。係長がこんな状態の私達を慰めるために、係の人達と一緒に自宅で前祝いの宴を行って下さいました。物質のない時、自宅の鶏をめでスキ焼のご馳走にあずかりました。

八月六日の朝でありました。明日は長崎へ帰れるというので、私達三人は張り切って何時もより早目に起床しました。快晴でした。乏しいながら誠意の籠った寮の朝食が整えられていました。何時もの様に私達は鷹野橋停留所の長い列に並んで江波行きバスを待っていました。私達三人はこの俣、会社へ行くか広島駅で切符を買ってからにするか話し合ったが、切符は帰る時に購入することにして、その俣バスに乗ることに決まりました。バスが来て私達の列は先頭から一人ずつ、乗車口に吞まればはじめました。その時私は会社の届に必要な印鑑を寮の机の引き出しに入れたまま忘れて、今持っていないのに気が付きました。私はすぐ「寮に引き返して印鑑を取って来るから、二人はそのまま出勤する様に」伝え、急いで寮に引き返しました。寮監の中井さんは朝の庭掃除を終えて、一人つくねんと玄関の門前に立っていました。私は印鑑をポケットに収めると、二階の室から階下へ降りて来ました。中井さんは今から急いで鷹野橋へ行っても通勤バスはもう発って仕舞った後だから、お茶でも一杯呑んで行きなさいと引留めるので、二人は応接間で熱いお茶を呑みました。中井さんは「私も今朝は市役所へ行く用事があったが、なんだか気が進まず、あなた達を送り出してから、しばらくボン

ヤリしていたのですよ」と言つて、虫の知らせとでもいうのか、不吉な予感を二人共感じていました。寮のオバさんは台所で片付物をしている様子でした。急いで寮を出てもバスはいないし、この俣ここに坐つていても予定の挨拶廻りが済む訳でもないのです、私は電車で江波終点を目指して思い切つて寮を出ました。

終点江波行きの市電の車中の人となつた私は、明日知れぬ身で、再び広島へ出張して来ることもなからうと、ここで過ごした三ヶ月の中で歩いた広島市内の窓の外の景色を見ていました。舟入町を過ぎて、やがて電車は終点江波電停に着きました。坐つているまばらな客の前を通つて私は真先に電車を降りました。小川の板橋を渡るとこのあたりは幅五米位の道を挟んで、右手は陸軍の射撃練習場、左手に遠く舟入町が見える一面の芋畑で、午前八時を過ぎた、通勤ラッシュの後のひっそりした真直ぐな道で、芋の葉の上には、まだ乾き切らない朝露が、キラキラ光つて居ました。平凡な夏の広島周辺地区の、空には雲もなく、太陽が眩しく輝いていました。私の視野の中に、ただ一人近づいて来るモンペ姿の婦人がありました。遠く幽かにB二十九の爆音らしい音が覺えたような気がしました。その時二十米位の距離に近づいていた婦人が、急に空を見上げて狼狽した様子で、私もそれにつられて空を見上げました。B二十九の機影は見えませんでした、確かに急降下のエンジン音を吹かせるような音がして、かなり上空の感じでした。その時、私は見ました。小さな白い落下傘が二つ、相当の距離を保ちながら、次第に落下してくるのを丁度打ち上げ花火のときに見られる白い小さい二つの落下傘でした。私は急に身の危険を感じました。瞬間、中空に炸裂する大火球を見ました。青より白色に近いマグネシウム色の大爆発でした。

私は思わず路上に伏せたと同時に、爆風と轟音が身体を通り抜けました。が、意識の中で妻や児の顔が回転するフィルムのようにカラカラと音を立てていましたが、その後気も遠くなくなって何も分からなくなって仕舞い

ました。瞬時の事でした。素肌を焼きゴテで焼かれる様な疼痛で吾に帰りました。私は目を開けて見ました。濛々たる砂塵や爆煙で、海底の暗い視野のように総てがボンヤリしていました。私の頭脳自体がショックで壊れかけたのかも知れない。頭髮も肌も熱線の放射でジリジリ焼けていました。が、私は生きていることをハッキリ感じました。空中を飛ぶ瓦の触れ合う音や、物の落下する音、雑多の破壊音が近く遠くを、身を巡って聞こえました。フィルムのカラカラ廻る音はこの瓦の音でした。それぞれの音も、爆煙も収まった時、私は見ました。高空に迄立ち昇った茸状の巨大な火柱を、竜巻のような火柱はその位置を移動するでもなく、その原点を踏まえた俣、頂点ではさらに高く、更に横に大きく広がりがりながら、火山の噴煙さながら盛り上り、湧き、巻き返りました。太陽の光線を受けながら、虹色のプリズム光が複雑なりズムで万華鏡のように変化しました。高度二千米に達するこの火柱は、生き物の様に変化を繰り返しながら、徐々にその傘の領域を広げました。私はこの人工雲は「毒ガス」だと思いました。この雲が次第に降下して広島全部を包んだ時、生きて呼吸をしている生物は忽ち斃死するのだと思いました。

天空は次第に暗くなって来ました。ここでボンヤリしている時ではありませんでした。私は畑の中に残った灌木の茂みの中に、ひとまず身をひそませ、横たわることにしました。日食時の太陽のようにその輪郭だけが、今は空一面を覆った不吉な雲の中にクッキリ見えました。ここから見渡すことのできる町、舟入町一帯は倒壊をまぬがれた家の軒先から火の舌がメラメラと燃え上がっていました。遠い線路上の電車も立往生したままの位置で炎上していました。十七、八才の少年工の一隊も私の回りに避難して来ました。油の滲み込んだズボンからブスブス煙を出している少年は、友達に指摘されて、驚いて煙の出ているズボンを慌てて脱ぎ棄てました。胸にガラスの小さな破片が何か所も突きささった少年は血と汗を流しながら、まだ苦しうに肩で息をしてい

ました。この周辺地区には町工場が多く、朝の仕事始めた少年達は不意を打たれて、何が何やら分らず、無我夢中でここまで逃げて来たのだと言いました。ある少年は工場の近所のガスタンクが爆発したのだと言い、又ある少年は、百キロ位の大型爆弾が近くに落ちたと思ったとも言いました。それぞれの少年達は、互いに手負いの傷をいたわり合ったが、ここには手当をする一枚のガーゼもひと巻きの包帯もなかった。全部の少年工は半裸で、油と血と汗にまみれ、その中の一人の少年は不安と動揺とオドロキのショックに疲れ果てたまま、シクシク泣いていました。その頃急に黒い俄か雨が降って来て、私の腕まくりしたシャツに点々とシミを作りました。重油の交った油のような黒い色の雨でした。赤く焼けた私の顔面や腕の傷にもその黒い油のような雨は情け容赦もなく滲みましました。倒れて苦しんでいる少年達はしきりに私を求めました。歩く力の残った少年が二、三人クリークの水を空缶にくんで来て、苦しがる爛れた唇に油の浮いた水をそそぎ込んでいました。その時かすかな爆音がして、偵察機らしいと思いました。

私はここも安全ではないと思つたので、ここから二百米位離れた陸軍の射撃演習場に逃げることにしました。かつて通勤の途中、私はこの射的場の土手の陰に監視壕があることを知っていました。私はヨロヨロと立ち上がると、その壕をめざして歩きはじめました。私は畑中の道でひとりの異様な風体の男と出会いました。向こうもフラフラ私に近づいて来ました。身長二米に近い仁王さんの様な大男でした。半島人だと直感しました。このあたりには半島人のバラックの集団が多かったからです。男は首から鍋と釜を振り分に荒縄で括つたのをブラ下げ、腰には数朱つなぎに南瓜を巻き付け、両手にはしっかりとダラリとした鶏の首を握りしめながら近づいていました。顔面は熱線に焦げて朱く、両眼は物湧きのように光っていました。私はその時バイタリテイのひとつの典型をまざまざと目にし、威圧されていました。私はやつとの思いで目的の看的壕の中に辿りつく

ことができました。奥から哀号哀号と泣き声が聞こえました。全裸の婦人が全身を赤エビ色に焦げて、泣きながら苦しそうにのたうっていました。私はどうすることも出来ず、入口から五米位の「型」に曲がった頑丈な木のペンチに腰をかけました。黒い雨は止んでいました。その時、勤労働員の学生が二人私の側に来てペンチに腰を下しました。一人の学生が私の顔をシゲシゲと見て、「大分ひどい傷ですよ、あなたの顔」と言う。雑囊からクリーム瓶を取り出し、白い油薬を私の顔の左半面に塗ってくれました。

「痛いでしょう、ひどい火傷ですよ」と学生達は交互に言いながら、私の顔を見ながら目をみはりました。私は再びその時、私自身の左顔面と左腕全体にしびれる様な疼痛を感じました。はりつめていたものが、急にガツクリ崩れて、私は自身の負傷が尋常のものでないのに改めて気づきました。あの瞬間、熱線がジーツと私の身体を照射するのは知っていました。私は事前に完全伏臥の姿勢を執ったつもりでしたが、顔の正中線より左側に熱線を受けた左半面は、掌で覆った跡もなく完全に焦げていました。勿論髪もギロギロで頭皮まで焦げていました。私は熱線の照射を浴び、直後の爆風で芋畑の中に吹き飛ばされていたのです。完全に伏臥となったのは第二次動作にすぎなかった。学生達は広島工業学校の生徒で、近くの観音工場から避難して来たのだと言いました。例のクリーム瓶の薬は「椰子の油」で、何時も雑囊に入れて携帯しているようにと、彼の母の心遣いが今ここで私を救援する応急薬となったのでした。私は彼の母と彼の親切に心から頭を下げ、その厚意に感謝しました。

広島島の空は黒煙に覆われ、太陽を失った町では時刻も計りかねていました。先行していた同僚や、会社の人達も心配しているだろうと思うと、今ここにじっと坐っている気持ちにはなりません。私はほどけたゲートルを不自由な手で巻き直すと、学生に訣れを告げ、すぐに壕を登って、造船所へ向かいました。途中、半

島人の部落は竜巻が通り過ぎたように、ただ木材の乱雑な集積した山に変わっていました。過ぐる日、活躍した江波山高射砲陣地もシーンと静まり返って、衛兵の姿も見られませんでした。造船所のバラックも梁が落ちたり、床が落ちてみんな浜地の木陰を求めて避難していました。私を見付けた防護団の一人は、すぐ松林の小屋で応急手当を受ける様に教えてくれました。小屋の中には白い塗る薬を入れた石油缶が幾缶も蓋を切つてありました。自分で勝手に薬を塗る様に言われたので、負傷した左手を缶の中に突つ込み、掌に薬を掴むとそのままベタベタと顔面からトロケた首にそつと部厚く塗り付け、半身白ダルマのようになって小屋を出ました。外は蒸し暑い砂漠で油を塗らない右半身から全身の汗が容赦もなく吹き出しました。

時刻は正午に近く、私を心配して岩永君と佐藤君は街の方に私の救援に行つたままなかなか帰つて来ませんでした。広島の街は次々に燃え広がって、昼ながら暗い空に煙とドス黒い炎を中央高く立ち昇らせていました。無風の正午でした。一袋の乾パンを昼食の配給で貰つたが、苦痛と疲労で全然食欲がなく、松の木陰にうずくまつてウトウト眠っていました。間もなく私は起されてみると、救援の二人が帰つて来ました。白ダルマの私を見付け、一瞬とまどつた二人も私の無事を知り走り寄つて来ましたので、三人は抱き合つて喜びました。二人の報告によると町々の橋は落ち、累々たる屍の街の何処にあてがあるともなく、私を捜しあぐねて失望して帰つて来たところで、私に逢えたことは、言葉通り「地獄に仏」の気持ちであつたと言いました。「橋が落ちたので町へは行けない」と報告が伝わると、そこらにたむろしていた女子事務員達が家族の事を思つて、一度にどつとこらえかねた泣き声をあげました。設計室の床の一部が傾き、階下の診療所には大きな梁が落ちかかつていました。本部では従業員の退場についての対策が講ぜられました。午後五時から造船所の全てのランチを集めて、海路から退場する様に指令が出されました。私達の寮は宇品港の方に近いので、宇品行のランチに乗

ることにしました。太陽を失った大広島島の空は夏の午後五時というのに冬のように暗く、ランチから見る広島湾は、折からの夕風で波ひとつなく、海面には幾条もの三角州の街ごとに区分された火竜が無気味な音を立てて真直ぐに壮絶に映っています。死の町、大広島は惨劇の跡をかくす様に火中に自らを投じて燃え続けています。

宇品の波止場に着いたのは、既に黄昏の時刻で、不安と焦燥で黙々と従業員の誰一人としてもものを言う者はなく、力なくゾロゾロと上陸しました。宇品の波止場から広島町の町に近づくにつれて、この宇品の街の破壊状態も惨憺の度を強めていました。川岸の筏の上では被爆した船頭達がボンヤリ放心状態で、川面に映る大島の街空の炎を見つめていました。半裸の小学生らしい一群が声もなく黙々として近づいて来ました。

目も唇も 爛れたる児を 背負い来る

少女の髪も 半ば焦げたり

今は泣く声もなく、半裸の少女と見分けにくいこの一群の列は、黄昏の道をさながら幽鬼のように力なく、そろえて上げた双手の先には、婦人の長手袋のように黒く焦げた二の腕から先の皮膚をダラリとぶら下げたまま・・、完全に髪が残った子は殆どいませんでした。ニグロの髪のように燃えちぢられて性別さえ殆ど分らず、年上の子の少しふくれた乳首だけが女の徴として判別されました。

私達も暮れゆく橋のたもとに呆然と立って、この幽鬼の列を励ましてやることさえ忘れ、この朝突然降って湧いた地上の惨劇に生き残ったこれらの幼い証人達を、息を呑んだ俣見送っていました。

大広島の町の炎の影は次第に鮮烈に大川の水面を埋めて流れていました。御幸橋に近づくと、専売局の倉庫が燃えるらしい夥しい煙に映えて、火勢が一層盛んでした。寮はもう近い。どうなっていることか？寮監夫婦は、そして彼等の子供達は、私達にも不安がいよいよ濃くいつしか足早になっていました。御幸橋を渡ると千田町である。この辺一帯は広島周辺の地区であるにも拘らず、屋敷町の塀も家も殆ど大破に近い惨状で、人影は一人もありませんでした。私達三人は寮の前に立ちました。今朝出勤の時とは何という変り様でしょうか？二階建てのこの邸の二階の部分は殆ど落ちかかっています。人の気配がして寮監の奥さんが、応接間の暗がりから出て来て、三人共無事である事を知ると、抱きつかんばかりにして喜びました。あの悲劇の時間に死の中へ向って行った私達三人は恐らく、即死か行方不明であろうと言いました。その夫の中井老人も市役所に行くのを渋っている中に、あの時間が近づいて、玄関を十米も行かぬところで被爆したと言いました。広島工業専門学生で寮監の長男の消息は、今朝出た俣連絡がなく、生死不明でした。一抹の不安が迫った中で私達は次第に押し迫って来る炎の中で、今夜をどう過すか？話し合いました。邸内の庭水道の蛇口が折れて間断なく、水を吹いています。初めて吞む十時間ぶりの水道の水が甘露の味で私達は息もつかず吞めるだけの水を吞みました。

夜を迎える次の方針を決めました。

- 一、食べ物等、大切なものは邸内築山に掘った防空壕に入れること。
- 一、寮母や子供達は壕の中で眠ること。
- 一、男達は交代で火災を見張ること。

一、最後の時は、付近の川にある船を確保して海へ逃れること

以上の四つでした。

私達は庭に立つたまま、炊き出しの貴重な握り飯で腹を満たし夜の火炎との戦いに備えました。夜になって火勢は猛威を極めました。防火等受付ける余地はなく、広大な広島全体が燃える火の海でした。寮の裏手は広島工業専門学校のグラウンドで、最後の防火地帯でした。私達は交代で眠りをとりました。夜の白むころ、炎は運動場のクリークを隔ててやっと止まりました。

八月七日の朝が明けました。大破、中破の家が多いこの屋敷町の小路は、倒れた家や塀で足の踏み場もありませんでした。町内会事務所で配給があるというので、非常用の缶詰を貰いに行つたところ、造船所の幹部の方に逢いました。長崎からの出張者だと覚えて居られ、「今日中に直ぐ帰らぬと、長崎へは一ヶ月は帰れぬかも知れんよ」避難列車が出る筈だからと、教えて貰いましたので、会社への連絡をお願いして「直ぐ長崎へ発ちますから、何卒よろしく」と後事をお願いしました。寮に帰って、オバさんにその旨を伝えると、この俣別れると水の別れの様な気がすると心配しながらも、なげなしの“米”をはたいて三人分の握り飯を作ってくれました。私達はグツとこみ上げてくるものを押さえながら、とにかく歩けるだけ歩いて、列車の出る己斐（現在の西広島）駅から長崎へ帰る決心をしました。一歩でも二歩でも長崎の方へ踏み出したい気持ちはどうすることも出来ませんでした。後ろ髪を引かれながらも三ヶ月間同じ釜の飯を食った、飯と言つても大半は配給の大豆でしたが、寮の家族達と訣れて、何時帰り着くとも予想し難い長崎へのこの帰郷は内心自信のない出発でした。私達は三ヶ月の長期出張から解放されて、第一歩を瓦礫の上に踏み出しました。途中敵機の爆音がして、焼

跡の地藏さんの影にかくれたりしました。此処から見る広島は、一望千里瓦礫と廢墟の砂漠で、遠くにただ一本の煙突が見える無惨な姿で全市の到る処で、余燼がくすぶっています。広島文理大学前の電車通りでは、ボロ切れのように爛れた被爆者が横に倒れて、僅かにうごめいていました。道路の区別が分らないので、とにかく焼野ヶ原の街を出来るだけ真直ぐに踏み越えて行くことに努めました。私は左手を首から吊った風呂敷の中に入れていたので、バランスが取りにくく、障害物の残骸に何度も足を取られて、倒れそうになりました。その時目をやった足もとに、最初の半焼死体を見て思わずゾッと足がすくみました。脚から腰骨迄は燃えた白骨でした。胸から上は半焼けで、焼け爛れた胸から上は半焼けで、胸腔から肺や胃や心臓や腸の一部がゴツチヤになって、ドロリと流れ出していました。男女の性別も年齢も判別できない、勿論頭部も半焼けで、私と佐藤君は二人共立ちすくんだ俣思わず顔を見合わせました。私達が広島で見た無惨な焼死者の第一号の強烈な印象でありました。そこを出ると至る所、累々たる焼死体が折り重なり黒焦げになっていました。慣れるということとは恐ろしいことでした。それから段々と神経が図太くなって少々なことではもう驚かなくなつて仕舞いました。川に行き当たると、その俣死体の山を越えて、水辺に下る階段を探し求めました。石段も折重つた死体の山でした。川面は死体で堰止められていました。途中、食糧営団の人からカンパンを一袋貰つたのを手に持っていたが食欲は全然なく、死体をよけて石の上に腰を下ろしながら、この川を渡る算段をしました。勿論私の左手は火傷がひどく、泳ぐことは不可能でした。私は浅瀬を求めて、下流の方に歩きました。上流の橋までは相当の距離があり、通行不能の状態に崩れているのが見えたからです。私は浅い所に浮いた仏達の上を這い渡ろうとしましたが、ズブズブと水に沈んで、上体が水没すれば、左手が化膿して腐つてしまうと判断しましたので、渡河可能な地点まで遡りました。

こうして苦勞しながら、幾つかの三角州地帯の焼跡へと移動をつづけました。広い道路へ出ると、ここは避難の人達が一杯で黙々と歩いていました。宮島方面や、軍部から救援のトラック隊が、砂煙を上げながら、幾台も幾台も元氣な消防団員や在郷軍人達を満載してくるのに出逢いました。広島では消防署も警察署も全滅でした。トラックを降りた救援隊は、長い鳶口を死体の背中に打ち込んで、ズルズル引きずりながら、死体の小山を築いては、道路の警戒をしていました。焼け残ったコンクリートの橋では、真ん中にポツカリと口をあけて、そこから川を流れる水が見られました。その橋の欄干には、仁王立ちの俣、万歳の姿勢で頑丈な鉄かぶとの男が死んでいました。爆弾の起爆装置と称する落下物の周囲には俄か作りのロープが張り巡らされ、放心した人達はそれでも其処を遠回りして歩いていました。救援隊の人達に比べ罹災者達はノロノロと少しずつ郊外へ、郊外へと思いきいの方角を目指して歩いていました。八月七日の陽はジリジリとうなだれて歩く人々の首筋に照り付けていました。私達は皆大川の向うの己斐（西広島）駅を目指して歩きました。救援列車が唯一つの目当てでありました。

陽はかなり高くなっていました。難民の私達は急に混雑しはじめて、私達三人の距離も、疲勞や氣力の差につれてまちまちになってしまいました。己斐（西広島）駅が対岸に見える大川の鉄橋が私の目の前に来ました。千米位の距離でありました。迂回する時間も体力もなく、私は恐る恐る体のバランスに細心の注意を払いながら、一本一本鉄橋の枕木の上を渡りました。橋の下の川の水を見ると目が眩みそうで、努めて前方ばかり見て渡りました。それでも橋の途中からは這うようにして渡りました。私は漸く鉄橋を渡り終える事に成功しました。長い長い、長過ぎる鉄橋でありました。己斐の駅は長蛇の列でありました。私は岩永君を見付けると、荷物を頼んで、佐藤君を捜すことにしました。彼は私達二人と途中からはぐれて仕舞ったのです。私は長い列を

一人一人確かめて歩きましたが、長い列に彼はいませんでした。近所に屯する避難者の群の中も丹念に見て廻り必死の思いで、私の頭の中には彼を同行する義務と責任感で一杯でした。一本の西下する避難列車一号が、午後一時頃この駅を出発する予定で、時間に迫られ、私は責任感とあせりで一杯でした。罹災証明書を駅員に見せて一人一人改札口を通らねばなりませんのにととうとう時間迄彼はこの駅に姿を見せませんでした。生きて居る事は確實だし、鉄橋の手前迄は一緒だったので、自分に言い聞かせて遂に断念することにしました。

私達を乗せた己斐発避難列車第一号車は、やがてノロノロと終点・長崎駅を目指して動きはじめました。私はやっと窓際の席を占めることができました。目の前のホームの水道栓からは止まらない水がほとばしり出ていました。私は席に坐ったまま恨めしげに横目で見過ごすほか、どうともすることも出来ませんでした。国鉄の制服を着た人が握り飯を一つ私の掌上に載せて下さいました。食欲は全然ありませんでした。この人には明日までの大事な食物であるから、私は丁重に断りました。

その人は、「門司で降りるから自分は大丈夫だ」「あなたは長崎迄で遠いから、腹が保たぬだろうから、遠慮せずに、無理にでも食べるように」としきりに奨められました。私はこの非常の事態にも失われていない、この人の人間愛に深く打たれました。自分でもいくらかは感じていたが、この人には私は重傷者に見えていたらしいと感じました。疲労し切った私の体力は既に限界に来ていました。四十度以上の熱が始め、悪寒に身体が小刻みに奮えはじめていたのです。この仮坐つていけば、終点長崎へ着くことが出来る、そう思ったら安心感に被爆以来の疲労が一度に出て、椅子に坐つて背をもたれた俛、昏々と深い眠りに落ちました。

八月八日、昼近く、己斐駅を出てからの避難列車は長崎の終点駅に着きました。風呂敷で首から吊るした左腕はブヨブヨに膨れ、黒い皮膚の下には今にも破れそうな火傷の奨液が一杯たまっていました。長崎はその時

すでに空襲警報中で、小型の艦載機らしい爆音が上空を巡っていました。一刻も早く治療を受けぬと傷は悪化するばかりでした。私は大胆にも空襲下の町の軒下を伝って、船津町に在った三菱病院支局へ駆け込みました。が、空襲下の病院には人影もなく、偶然廊下に出て来られた、眼科の佐藤先生を見つけたので、先生にすがりました。先生は私の旧制中の先輩であり、彼の弟とはクラスメートで旧知の間柄でしたので、直ぐ眼科の治療室に入りました。先生が缺で薄い表皮を切開すると、膿盆にいっぱいになるまで溜りに溜っていた体液はザーツと流れ落ちました。

私は病院を出ると、勝山小学校前の文具店松栄堂脇の坂を下って、桶屋町の両親の家に着きました。私の妻と児が住んで居た稲佐公園に近い家は、私の出張中に疎開して、番地は分っているが場所が分らなかつたからです。空襲警報で避難した無人の実家に上り込んだ俣、一人で長い警報解除を待っていました。解除のサイレンが鳴って、家の人達が帰って来ました。異様な風体の白い包帯を巻いた白坊主が、一人勝手に家を上り込んで仏壇の前に坐っている私とは知る由もなく全く驚かされたのです。その日の朝日新聞は一面のトップ記事に、「広島へ敵新型爆弾B29少数機で来襲攻撃相当の被害、詳細は目下調査中 大本営発表」とあったが、すでにこの日には広島で被爆した人々、あるいは七日に広島市を通って来た人々によって、その惨状は伝えられていました。落下傘は空中で破裂、人道を無視する残虐な新爆弾とも朝日新聞は報道していました。又国民には京浜西南へ、米英小型機豊川附近へ、戦爆約百機来襲とも報じていました。私は広島への何処かですでに骸となつているに違いないと両親も諦めていたので、仏壇の前にドカッと胡座して、白坊主の幽霊と思われた私は生きて帰っていたのです。妻にはあらかじめ葉書で帰崎する旨連絡していましたが、迎えに来た妻子と、その日の夕方水ノ津町の高台の自宅へ帰りました。二〇四番地ですぐ隣組の一達が見舞に来てくれたので、広島

惨状を詳しく話しました。特に白い着物は熱線を反射し、黒い着物は燃え易いこと。ガラスの破片がどうにも手のつけられぬ外傷となること。「ピカッ」と来たら頑丈な物陰に伏せることを強調したので、話は人から人に伝わって広がっていました。

その夜、私達親子三人、三ヶ月振り、同じ屋根の下で話しました。生後五ヶ月の長男は見違えるばかり大きく成長していましたが、私は四十度近い高熱と吐き気で苦しみ、何辺も血便を下痢し、赤痢ではないかと心配していました。造船所の工場近く五十米以内の人達は、強制疎開で浦上方面へ皆移転していました。逆に私の家は私の出張中に、稲佐公園の高見の家から、最も造船所に近い、危険な水の浦に移っていました。すでに八月一日の爆撃で、製缶場のボイラードラムの臼の様な大きな破片が、近くの防空壕の上に落ちていました。爆弾の中の一発は直ぐ上の変電所近くの島に落下し、直径二十米位の穴を穿った事、近所の中学生が避難の途中敵機の機銃掃射に倒れたまま、何時間も検視が来ず放置されていたこと、壕の上土が崩れ続け生きた気がしなかったことなどを聞き教わりました。漸くの思いで長崎に帰って来たが、この地帯の人達も既に冷徹な死の洗礼を体験していたのです。

八月九日朝、高熱の悪寒で寝汗をビッシヨリかいて目を覚ましました。造船設計の事務所は目の先に在りました。その朝私は無理を押しして少し早目に出社し、第二事務所六階別館にある職場で、異様な包帯姿が注目のとなり、広島から生きて帰って来た証人として、質問の矢を浴びていました。特に私は皆さんのために窓ガラスを全開してできるだけ爆風が吹き向けるようにして貰いました。今迄は逆に窓を閉めていたからです。私は本館の野村課長に広島から帰った事を報告しました。岩永君は同じ避難列車で来て、諫早で無事下車したと、佐藤君は無事であるが、途中ではぐれどうしても一緒に連れて来られなかった事情を述べました。広島のと

被害について、ただ一発の爆弾で全滅などとは信じられないと言われていた時でした。「ピカッ」とあの閃光がした。私は本能的に広島島のあれだとその低机の下に飛び込みました。轟音がして爆風が室内を隅なく吹き巡り、十センチ先もみえない程のゴミと、図面や書類が吹きまくられました。爆弾から薄れると、散乱した椅子や図面などを掻き分けて、別館の空から飛び出すと後ろの岩山の崖をよじ登り、無我夢中で岩山のコンクリート作りの防空監視塔の中に駆け込んだ。外を見ると双眼鏡をフツ飛ばされた若い監視員が真赤に焼けて倒れていた。我に帰って見ると、私の上半身や顔面を固く包んだ包帯は跡形もなく、鯨の赤味のような傷口はすべて粉をまぶした様にゴミに覆われていた。浦上方面の上空には広島で見た茸状の雲が、広島からここまで生命懸けで逃れて来た私を冷笑するかの様に、不敵に立ち昇った巨大な悪魔の火柱。この時すでに、明日の日本の運命を予言していた。

その後、大造船所も鍋やフライパンの製作で細々と命脈を保っていたが、企業整備の人員整理で私もその犠牲者の一人となった。私は進駐軍の労務者や小さな会社の請負いなどで混乱した時代を送っていたが、旧制中学卒業後に受けた中学校英語教員検定試験合格で貰っていた教員免許状が役に立って、昭和二十三年新設された新制中学の英語教師となり、福田中学、西泊中学を振り出しに、長崎港外高島炭坑の中学でヤマの中学生達と毎日海を見ながら少しずつ敗戦の虚脱の中から立ち上がろうとしていました。

昭和三十年一月、十年の英語教員の仕事から、再び古巣の造船所へ戻って来た。十年の空白は物、人共に影響が大きい、とにかく私は不思議に生きて来た。今となつては十年の空白は掛け替えない貴重な人生の十年で、切り離して考える事は出来ない。教え子達も立派な社会人となり母親となつて新しい日本に生きています。その後私はタンカーを作る事に専念して来たが、やがて定年退職しました。被爆者特有の症状で幾年も苦

しんだが不思議に私は生きて満九十才と八ヶ月になった。顔や腕の傷も少しずつ元に戻った。生後五ヶ月で被爆して「アイタ、アイタ」と瓦の破片で傷ついて初めてものを言った長男もそれから六十年、三菱の機械工場で第三係長等を勤めていたが、去年二月四日被爆に依る全身ガンで六十年の人生を終わりました。岩永章君はその後長崎市役所総務部長にもなり、佐藤邦義君は熊本県本渡市役所水道課長それに私の三人、広島、長崎原子爆弾二重被爆者として不思議に生きています。今でも被爆から六十年を迎えた空に長崎の鐘の音が響きわたります。

一九四五年八月九日午前十一時二分、米軍機から投下された一発の原子爆弾は、この空で炸裂し、一瞬にして長崎の街を破壊しました。死者七万四千人、負傷者七万五千人。何も分からないまま死んでいった人々。水を求めながら息絶えた人々、黒焦げになり、泣くこともできないで目を閉じた幼な子たち、かろうじて死を免れた人々も、身体に癒すことの出来ない深い傷を負い、今なお原爆後障害に苦しみ、死の恐怖に怯えています。長崎では多くの若者が原爆や平和について学び、自ら活動に取り組んでいます。若い世代の皆さんにお願いして訴えます。

『最後に』

非核恒久平和は私の悲願であり文芸を通して実践して来たつもりです。米国の核戦略は最近テロ以来キナクさく、これでは核の犠牲者である私達は浮ばれません。彼の日、ヒロシマ・ナガサキの川は滅びず、多くの仏達は「人間の筏」となって、川に海に沈みました。生き残った者達も今の彼の日の事を忘れず、万灯を流してその霊を弔っています。新しく来る年も平和であることを祈ってやみません。

原子爆弾によって無念の死を遂げた人々に、深く思いを巡らせて下さい。一人一人が真摯に過去の歴史に学び、平和への大切さや、命の尊さについて考えて見て下さい。

被爆六十年を迎えた今、原子爆弾で亡くなられた方々の御霊の平安を祈り私達は核兵器廃絶と世界恒久平和に向けて、決してあきらめることなく生命のかぎり力を尽すことを誓います。

(二〇〇六年十一月十五日)

《山口 彊（やまぐち・つとむ）さんのプロフィール》

一九一六（大正五）年長崎に生れる。瓊浦中学卒業後、三菱造船所造機設計課機関機装係に勤務。商船を設計。一九四五年五月三菱広島造船所に出張、八月六日被爆、三日後の九日長崎で二度目の被爆。戦後占領軍通訳・中学の英語教員を勤めたあと三菱造船所に復職、定年までタンカー設計に従事する。二〇〇六年には国連で反核を訴えた。長崎でも高校生に二重被爆体験を訴えている。またその二重被爆体験は映画化された。十代より短歌を始め一九九九年八月には第三十七回原爆忌文芸大会で県知事賞。著作に『歌集 人間筏』（あすなろ社・二〇〇二年）がある。